

別役実

けものづくし

真説・動物学大系



別役実 (べつやく みのもる)

1938年満州に生まれる。1960年早稲田大学政経学部中退。
1968年第13回新劇岸田戯曲賞、1971年第5回紀伊国屋演
劇賞、1972年第22回芸術選奨文部大臣新人賞受賞。

著書

戯曲 「マッチ売りの少女／象」「不思議の国のアリス」
「そよそよ族の叛乱」「数字で書かれた物語」「あーぶく
たった、にいたった」「にむくさむらい」「天才バカボ
ンのパパなのだ」「マザー・マザー・マザー」「木に花咲
く」「足のある死体／会議」(以上三一書房)。「移動」「椅
子と伝説」(新潮社)。

童話 「淋しいおさかな」「黒い郵便船」「星の街ものが
たり」「山猫理髪店」「そよそよ族伝説」(三一書房)。

その他 「象は死刑」「探偵物語」(大和書房)。「犯罪症候
群」(三省堂)。「電信柱のある宇宙」(白水社)。「虫づくし」
(烏書房)。

けものづくし 真説・動物学大系

一九八二年 九月二五日 初版第一刷発行

定 価 一三〇〇円

著 者 別役 実

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区三番町五

郵便番号 一〇二

電話 東京(〇三三)二六五—〇四六一

振替口座 東京八一二九六三九

印刷所 株式会社 東京印書館

製本所 株式会社 石津製本所

一四頁「月の沙漠」音楽著作権協会 許諾第八二一〇
九九二号

©別役 実 1982 Printed in Japan

不良本はお取りかえ致しますので小社読者サー
ビス係まで直接お送りください(送料小社負担)

けものづくし

真説・動物学大系



別役
実

■ 目次

いるか	5
らくだ	13
猿人	21
蛇	29
猫	37
ムコシ	45
ヨヨーテ	55
ボンゴ	63
チーター	73
虎	83
犬	91
ライオン	99
牛	107

ぬえ	115
きりん	123
亀	133
アメンシット	141
にわとり	149
くま	159
アイアイ	167
コウモリ	175
狒狒	185
もぐら	195
象	203
にんげん	211
動物園	221
あとがき	238

繪 〓 玉川秀彦

装丁 〓 遠藤 勁

いるか



科学小説作家ラリー・ニブンの、《既知空域年表》^(註1)によると、いるかは、二十世紀中に市民権を得、遅くとも二十三世紀の中頃までには、国際連合への加入が認められるであろうと、予測されている。そして、このことについては、さすがのラリー・ニブンも、言及することを避けているふしがあるのだが、その時、東洋の君主国日本は恐らく、国際連合を脱退し、生物的孤立の時代を迎えるのである。

「わが民族は、いるかの如きけだものと、席を同じうすることを潔しとしないのであります。」

わが国連大使が、声涙ともに下る演説をなし、一族を引きつれて大会場を退席してゆく様が、目に浮かぶようではないか。

地球上の総ての生物の中で、体重の割にもっとも重い脳をもつ動物が、人間であることは一般によく知られている。そして、体重の割に二番目に重い脳をもつ動物が、いるかなのである。

この場合あくまで重要なのは、「体重の割に」ということである。体重を度外視して、単に脳の重さだけを問題にすれば、マッコウクジラの成獣などは、ほぼ人間の六・五倍、九千グラムもある。これは生れたばかりの赤んぼの約三倍であり、それが全部脳なのだ。この巨大な脳が、一体どんなことを考えているのかと思うと、さすがの生

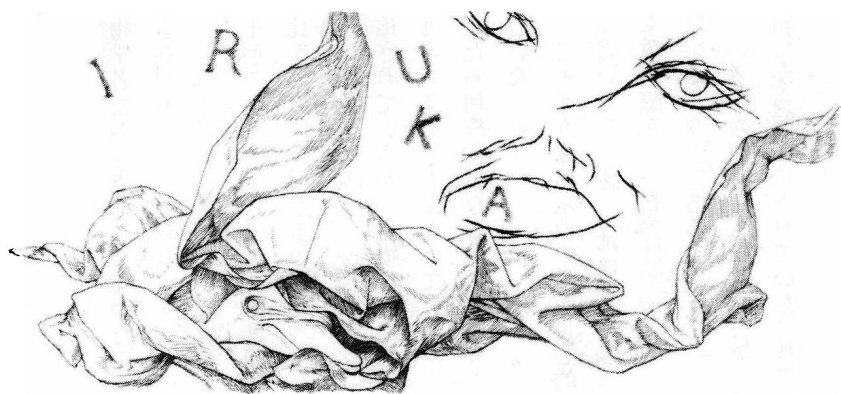
(註1) 我々の既に知っている空域において、あり得たこと及びあり得べきことを記した年表である。《未知空域》のことについては、「わからないので書いてない」ということで、極めて良心的な年表であると言われている。なお、この年表には、BC十五億年から、二千九百年までの事が記してある。二千九百年以後の記述がないのは、「ティラー・ブラウンの遺伝子普及し、以後人類社会には事件らしい事件が起らなくなる」からだそうである。

物学者たちも空怖しくなったのであろう、苦肉の策として「体重の割に」という条件をひねりだし、マッコウクジラは無視することに決めたのである。

もっとも、これでもまだ問題は残った。というのは、ヨーロッパの一部に棲息する小型のトガリネズミは、体重四・七グラムに対して、脳は百ミリグラムもあり、この比率は人間と同じものになってしまふのである。「トガリネズミを、人間と同等に扱え」という意見が、トガリネズミの棲息しない北アメリカあたりの動物保護団体から出されているが、生物学的には、これを拒否する根拠は何もない。今のところ「トガリネズミは、とんがっているから駄目だ」ということになっているが、「とんがっていたら何故駄目なのか」ということについて、論理的に説明出来る生物学者は、一人もないのだ。

この点が未解決なので、良心的な生物学者は、「地球上の総ての生物の中で」という言い方をせず、「地球上の総ての、とがっていない生物の中で、体重の割にもっとも重い脳をもつ動物は」という言い方をする。それが、第一に人間なのであり、第二にいますのである。

いるかの知能が、我々の想像する以上に秀れたものであるらしいということは、かねてから問題にされていた。彼等は（いるかのことである。日本では「奴等は」とい



うのが一般的であるが、この言葉の中にはいるかに対する蔑視が含まれているとして、欧米では禁止されている（既に複雑な言語体系を有し、一部の学者の中には、「彼等は既に抽象思考を開始した」という説を唱える過激派もいるのである）。

カリフォルニアの動物言語学研究所の発表によると、いるかは「いい表わそうとする物体に音をあてた時の反射音の特徴を、鳴き声で再現する」ことによって、言葉としているのだそうである。だとすれば、彼等は「舟」に対して音を発し、その反射音を聞いたことがあるに違いないから、「舟」という言葉は持っているということになる。また、「あっちへ行く舟」と、「こっちへ来る舟」では、反射音の特徴が違いに相違

ないから、それを使いわけることより「行く」という言葉や、「来る」という言葉も、持っているはずである。更に、海の中には色々得体の知れないものがあるから、そうしたものに音を発して反射音を聞いたとすれば、「不条理」という言葉を持っていたとしても、決して不思議ではない。つまり、「不条理」ということになれば、これはもう立派な抽象概念である、というわけだ。

ところで、このいるかの言葉の原理的な特徴は、我国における「いるか」という呼称を考える上で、極めて暗示的である。何故なら、「いるか」という呼称は、海中にひそむ彼等に対して「居るか？」と、疑問を投げかけ、答えられないままに虚しく返ってきたそれを、そのまま採用して呼称としたものだからである。

『古事記』上巻その三に、次のようなくだりがあるのは、誰でも知っている。

葦原色許男神、因幡国気多前ニ到リシ時、水ノ中ニ海豚ト云フモノ在リト聞ケドモ、
姿見エズ。是ニ葦原色許男神、海ニ向カヒテ、「イルカ、イルカ」ト告リ給フ。海豚
答ヘズ。葦原色許男神、悲シミテ、伯伎国ニ行キ給ヒキ。故、海豚ヲバ今ニ、イルカ
ト云フ。

・大國主の命が、兄弟である八十神に迫害され、うつ屈した心情をいくらかでも晴らそうとして、暗い日本海の波の下にひそんでいるといわれているに、ひとり呼びかけている図である。『古事記』の中でも、これほど暗く、悲しい情景はないと言つてもいい。^(註2)

ところで当然ながら、「いるかは何故答えなかったのか」ということが、問題である。本居宣長は、「いるかはその時そこに居なかったのであり、従つて答えられなかったのである」と言っているが、もちろん、この考え方は後の多くの国学者たちによつて、否定されている。「いるかは、居ただけけれども、敢て答えようとしなかったのだ」と言うのである。その方がどうも、いるからしい。つまりいるかは昔から、日本人に対しては偏見を抱いていたに違いないのだ。

しかし、いるかの「いるか」という呼称のことを考えた時、私は本居宣長の意見も、決して無視出来るものではないように思う。つまりこれは、「非存在への問い」なのだ。事実はどうあれ、大國主の命もまた、いるかはそこに居ないものと考へて、それへの疑問形をそのまま呼称としたのであるから、呼称の意味そのものは、宣長の考へ方に従つて成立していると考えた方がいい。

というわけで、不思議な符合であるが、我々がいるかを「いるか」と呼ぶやり方は、

(註2) 一般に流布されている古事記本の中には、この箇所が「因幡の白兔」の話にすり変つていふものがある。言うまでもなくそれは、いるかと我々の間がこじれて以後に、改竄されたものである。

いるかが対象に音を發して、その反射音をそのものの呼称とするやり方に、極めてよく似ているのである。一部の国粹主義者たちは、いるかが大国主の命のやり方を真似たのだというが、もちろん、そうではあるまい。万が一そうだとしても、そのことであるかとおしめて言うことはないだろう。日本人だって、近代に入ってから、欧米諸国の文化を、ずい分真似してきているのだから。

また一部の國際主義者たちは、常に日本をおとしめることによって「國際的」であることを維持してきた習性に従って、逆に大国主の命の方が、いるかのやり方を真似たのだと言う。これもまた、冷静な考え方ではないように、私には思われる。

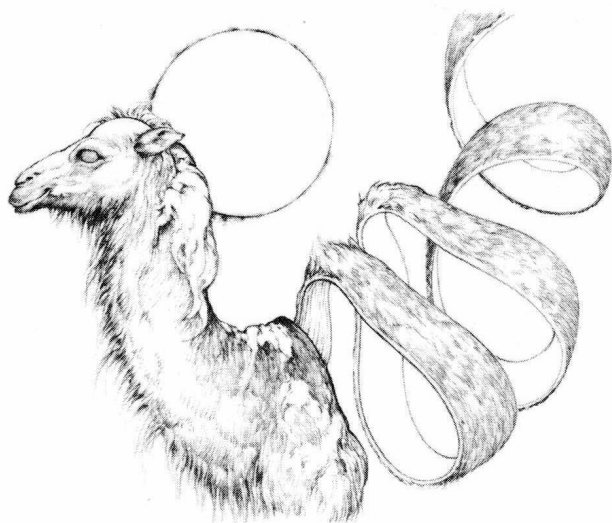
ともかく、どちらがどちらの真似をしたにせよ、問題の本質は、そこにはない。私はむしろ、こうした事情から考えて、いるか語の言語体系と日本語の言語体系が、極めて類似しているのではないか、という点に注目したい。これまでにいるか語の翻訳は、多くラテン語系の言語学者がたずさわってきているのだが、そこに日本語系の言語学者が、これまでのいきさつは一時忘れて参加すれば、これまでにない成果が約束されるのではないだろうか。

それによって彼等との交流が深まり、彼等に最初に市民権を与える榮譽を、我々が担うことになれば、彼等の國際連合加入によって仲間はずれにされることもなくなる。

これまでいがみ合ってきた事柄については、文字通り「話し合い」によって、解決できるのである。

私がこういう提案をしたら、或る言語学者は、「ともかく奴等が大国主の命にあやまるのが先決だ」と言った。日本人は度し難い。

らくだ



月の沙漠を はるばると

旅のらくだが 行きました

金と銀との くら置いて

二つならんで 行きました

金のくらには 銀のかめ

銀のくらには 金のかめ

二つのかめは それぞれに

ひもで結んで ありました

誰でも知っている。加藤まさを作詞による『月の沙漠』の最初の二節である。そして、これはかなり思いがけないことであるが、これこそが、らくだについて歌われた唯一の歌であるといわれている。^(註1)つまり、加藤まさを以外には誰も、らくだについて歌ってみようなどとは思いつかなかったのだ。もちろん、この点について更に追求すれば、動物学的に極めて興味ある問題が導き出されると思われるが、それは今回のテーマではない。

(註1) もちろん、総ての動物が歌に歌われているとは限らない。従って、この一曲しかないということ、らくだをおとしめて言う

問題は、「月の沙漠」である。これが「月夜の沙漠」のことなのか、それとも「月面上の沙漠」のことなのか、未だに確たる結論が出されていないのだ。言うまでもなく、「月夜の沙漠」のことなら、最初の音符をちょっと細工すれば「ツキヨノー、サバクオー」と歌い出せるはずなのだから、わざわざこんなあいまいな言い方をするはずがないし、かと言って、「月面上の沙漠」とするには、全体の情景がどうも地球っぽい。

実は問題はもうひとつあって、それは二節目に出てくる「銀のかめ」と「金のかめ」が、「瓶」なのか「亀」なのか、という点である。詩人や国文学者は当然ながら「瓶」を主張し、動物学者は、これまた当然ながら「亀」を主張してきた。「瓶だとすれば、『二つのかめはそれぞれに、ひもで結んでありました』とするくだりが説明出来ないじゃないか」と、動物学者は言うのである。「亀」なら、このくだりは極めて論理的に説明出来る。つまり「亀」なら、結んでおかないと逃げてしまうかもしれないからである。

この問題については、公平に見て動物学者の主張を採るべきであろう。詩人や国文学者は遂に、「瓶」を「ひもで結んで」おかなければならない理由を、発見出来なかったからである。しかし不幸なことに、このいきさつがそのまま「月の沙漠」論争に、

わけにはいかない。ハイエナやロリンアンテロープやサイやワモンアザラシやカバやパジリスクには一曲もないのだ。例の「海行かば、水漬くかばね。山行かば、草むすかばね」をへカバの歌として分類する動物学者がいるが、言うまでもなくこれは間違っている。